

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181(代案)
平成19年11月1日

年表で読む 古平の歴史

[123]

商工業 ⑨

各種工業の盛衰

◆でんぶん工場の衰退

でんぶんは、第一次世界大戦の頃は需要が増え価格が暴騰したため、後志の各地ででんぶん工場が盛んになった。しかし、戦後になると反動で一転して価格が暴落したが、その後価格はやや安定してきた。

町内でも、農家で販売できないような規格外のものなども集め、水車を利用したでんぶん工場が営業を始めた。

しかし町内では、大正末から組合ができて灌漑溝(水田に水を引く水路)などが次第に整備されると、病虫害の被害に悩まされるようになった。リンゴ園や、収入の少ない畑地など水田に転換する農家が多くなり、原料となるじゃがいもの確保がだんだん難しくなってきた。そこへ更に投機的なでんぶんの価格も不安定となってきたことから、町内のでんぶん工場は不振の状態が続いた。

大正一二年、浜町石井豊太郎、真

貝政治、佐々木留次郎、伊藤又次郎らが共同で、チヨペタン川観音下の水流を利用して大型の水車を建設し、共同澱粉製造所を新設した

がでんぶんの価格が下落したことや、

町内のじゃがいもの作付けが減り入手難になったことから、この事業は長くは続かなかった。

金融機関の推移

◆質屋業

古平は早くから鯨漁に恵まれ、道内では函館に次ぐ人口と経済の発展で繁栄を続ける小樽にも近く、陸路の交通は陸の孤島とも言われていたが、小樽港を基点とする旅客や貨物船の便があり、明治二〇年代にはすでに銀行の出張所が開かれていた。

金融関係についてはまとまった資料に乏しいが、鯨漁の好景気に支えられて町内での金融活動は盛んであった。

しかし、一般に生活は零細であり、片手間の家庭菜園を利用して自給自足的な家庭生活であった。その中で個人金融に大きな利便性を持っていたのが質屋であった。

古平に移住して来た人たちの多くは元は出稼ぎや、開拓地の移住者であったので質屋業は繁昌し、最盛期には四軒もあり、町営の質屋も運営されていた。現在の役場庁舎の

裏側に建っている石倉は、その当時の入質したものの保管倉庫であったという。

当時、庶民の金融機関であった質屋は、何時頃、誰が始めたかは知るものが無いが、明治二〇年頃、新地町の野村源吾が雑貨商を営むかわら質屋をしていたといい、新地町本間愛蔵の石倉はその質蔵であった。

← 山田治助質屋の「質物台帳」



当時、質屋を営業していたのは、

浜町 山田治助 平野五十郎

港町 松岡扇之助

新地町 野村源吾

であったが、山田治助、平野五十郎

は明治末のころには廃業し、松岡扇之助はりんご園も経営していたが昭和の初期までで、第二次大戦のころまで営業していたのは山田治助の二代目、山田常次郎だけであった。

北海道は資源の豊富な北の新天地として、開拓使の時代から北海道への移住が積極的に勧められ、国の政策としても恩典や優遇策がとられてきたが、それらは開拓農民に対してで、一般の出稼ぎの多くは精々着替え程度のものを持って練漁場へとやって来た。

練漁場へ出稼ぎに来る人たちの出身地は東北地方からがほとんどで、その職業もまちまちであったが農村出身者が多く、前年の暮れに賃金の前借をし、それで正月を過ごし、漁場で働いた賃金を持って帰り、帰るとすぐ田植えなどの農作業が待っていた。

そんな出稼ぎに来ている人たちにとって質屋は縁遠いものであったが、町内での個人相手の金融機関として繁昌していた。

◆盛んだった無尽講

民間で個人の資金を用立てるものとして無尽講は古平町内でも早く

から組織されていたようである。明治一五年（一八八二）から始まったという「明和講」が最も早いようで、瀧口栄太郎が講元となつて一九名がこれに参加し、会日は毎月一五日正式午から始めると定めていた。

←無尽講のひとつ「明和講」の帳簿

明治 祐五 年

第 八 月 十 五 日

明和講 金請取證

瀧口 栄太郎

関口 利勝様

町内各所で無尽講が盛んになったが、その運営が破綻して問題となることも多かった。やがて無尽を営業とする会社も現れるようになった。

「無尽講」というのは現在では全く見かけないが、顔見知りや気心の知れた人たちが集まって、個人的な金融をやり繰りする仕組みで、東京以北では無尽講と言われているようだが、「頼母子講（たのもしこう）」が一般的な用語のようで、鎌倉時代からあった庶民の互助的な金融の組織である。

その仕組みは、何人かが集まり中

心になった人が講元となり、毎月一定の金額を積み立て、順番や抽選によつてお金を借りることができたが、自分の積立金以上に借たり、自分の番でないときに借りると利息がつき、それが全体の利息となる。借りないでいる人は、当然その利息分が講での配当金になるという仕組みであった。会員には男性が名前を連ねていたが、会合に出席するのは女性が多かったようで、当時としては一種の社交場的な意味合いもあった。仕組みが簡単で手軽に運営できる、人気のある金融の組織であった。

しかし、その運営に当るのが素人で問題も多かったことから、大正四年に無尽法が施行された。無尽法によつて会社も設立され、小樽無尽会社（その後移り変わりがあつたが、現在の北洋銀行の始まり）は古平町にも進出した。

無尽法が施行されても、なおその規則に拠らないで無尽講を行う集まりもあり、大正九年、講会取締規則が施行になり、一定の金額以上の掛け金の場合には警察署の許可を受けることとなった。このような規制はあつたものの、大正一二年頃から無尽講での弊害があちこちで

現れ、中には無尽講により倒産状態になった者もあったという。

◆共益会創立

明治四二年、古平同士倶楽部の梅野吉太郎、米田岩吉、寿原栄吉、石河耕作、石井豊太郎、原田吉太郎らが、倶楽部の事業として、中小企業者の金融の便を図るため共益会を創立した。共益会の会員は一四名であったが、全体で二〇口の持ち数とし、一口について毎月三円を積み立て、これを資金として運用し利殖を図り、今後一〇年間は絶対に払い戻しをしない方針で、会員、会員外を問わず資金として貸付することにした。

会長 梅野吉太郎（後に富蔵）、監事 米田岩吉、寿原要太郎とし、町民の私設金融機関として発足した。

この共益会は、明治三年に施行された産業組合法による、信用事業を営営する目的で組織されたものであり、大正七年解散の際には、一口当り掛金が一〇か年で三六〇円のが、七五〇円の払い戻しであった。

昭和三年

く 続 く

▼三月一〇日

ようやく時化もおさまり春景色となった。小樽通いの勇丸、共栄丸も来た。カレ網、スケソ網も皆出た。九時から役場で灌漑溝工事のことについて協議するというので行つたが、一〇時頃になつてようやく始まつた。会員も八十名ほどになり、一二〇〜一三〇町歩の水田が出来る工事だとのこと。評議員の選挙、会則説明などがあり一時半終わる。この工事は五月からかかるとのことだが、古平もこれで随分水田が出来ることだろう。家でも年々四、五反ぐらいずつこしらえていきたい。五、六年前だと皆リング、リングと騒いで誰も水田のことなど考えなかったが、世の中も急に交代するようだ。

▼三月一一日

朝早くから勇ましい掛け声が聞こえる。いよいよ鯨場気分も盛り上がってきた。樽新によれば、雄冬沖で探海丸が

二四〇尾の鯨をとったという。今日はスケソが大々漁で、スケソ網六〇〇間ほどが全部出た。夕方浜へ出て見る、初鯨でもとれそうな海の色だ。スケソが納屋場に積まれ、大勢でメンタイ作りをしている。静かな暖かい夜だ。

▼三月一二日

いよいよ春景色となった。

高野名孝作さんの日記から

当時の世相を見る

(130)

ことで、あちこちで網おろしの祝いがある。網起こしの掛け声やら太鼓を叩くやら、歌声が方々から聞こえてくる。

▼三月一四日

新聞によれば、古平沖で探海丸が鯨百余尾とったとのこと。全町が鯨場気分になった。店は建網の支度相当に忙しい。町内では大漁祝いの太鼓など

町を歩く人達も皆忙しそうだ。中庭の雪引きをやる。客も切れない。四時頃、小樽方面で盛んに煙が出ているのが見える、火事らしいとのこと。浜へ出て見たが煙は消えそうにもない。火事だとすればかなりの大火だろう。

▼三月一三日

漁場では今日は大安という

を持ったにわか芸人が来たりしている。浜は大漁旗など飾られて網おろしをやる場所もある。

▼三月一五日

今日は祝聖会の例会日だが、二、三日前からカゼ気味で頭が痛く気分が未だに悪い。残念ながら欠席した、入会以来三回の欠席だ。しかし会員中

では一番の精勤だ。今日は珍しく好天気、午後二時頃まで休んでいたが、この好天気では休んでいても気がもめる。少し良くなったので三時頃起きて店の帳簿をつける。

▼三月一六日

カゼ気味で晴れなかつた気分も、今日はいよいよ八時に起床。町ではいよいよ漁の準備も出来たので活気づく。午後からは上ナギになり型入れるところもある。④さんでは今夜から投網するとのこと、本年の初投網である。早く吉報を聞きたいものだ、今日は吉日だというので何か所が網おろししたという。浜では旗など立てて景気よい。漁夫も今日は午後二時頃から湯屋に来ていたが、これが楽しみなのだ。夜になると太鼓の音も聞こえる。化粧した盛装の女も通る。

▼三月一七日

午後二時頃、スケソ大漁だと聞いたので久しぶりに浜へ出て見る。上ナギだ。沖には発動機船も多くなった。内地

行きの汽船が入港、スケソのかます詰を積んでいる。何でも佐渡方面へ行くとのこと。

世の中も変わり、岩内や古平のスケソが名物になるかも知れぬ。空には無数のカモメが飛び交って、どこを見ても春の気分になる。スケソ漁の様子を見るのに沢江まで行ったが、どこも大々漁だ。来年はどこもたくさんやると意気込んでいる。網も売れることだろう。

▼三月一八日

昨夜、キ、㊦ほかで投網したので漁模様を聞いたところ、キで一尾の初鰯があつたという。熊さんが寺田からスケソ一円買ってきたが、一〇銭で一一尾だという、安いものだ。佐渡、旭川、小樽などへ送るつもりで、ひと塩して干した。店も客があり、忙しく新聞を読むひまもない。夜、彼岸の入りというので三軒からマンジュウやボタモチを貰う、子供たちは大喜びだ。空を見ると星がキラキラ見えるが風がある。

▼三月一九日

六時半起床、寒い朝だ。雪がチラチラ降っている。スケソが納屋に掛かっているが、カラスが来るので、針をたくさん付けた糸を張っているが予防によい。明年はスケソ網が大流行との話があり、夏のうちに売り込まねばならぬ。納屋の下にはスケソの頭や内臓が山のように積んであるが、農村では肥料として売れるのに、古平ではまだこれらのものを粗末にしている。内地の人が見たら惜しいと思うことだろう。時化で、余市から新聞や郵便を運ぶ通送が駄馬に積んで来る。今日は命日で和尚さんが来られる。家ではボタモチを作る。桐の木を買いたいという人が来て農園へ行き木を見てもらったが、このままでは駄目で、手入れをしなければならぬという。雪も固くなったので果樹類の枝切りもしなければならぬ。

▼三月二十日

六時起床、浜に出て見る。昨日よりナギになったようだ。

小学校で三十四回卒業式があり参列する。この日もスケソ大漁、鰯刺網も満船、百叭(かます)も売ったところがあるという。

▼三月二一日

就寝中、お寺の鐘がゴーンと鳴ったので目が覚めた。今日は彼岸の中日でお寺参りの日だ。仏前に灯明をともして読経し仏陀の加護を祈る。天気がよいので浜に出て見る。青空が高く、真つ白なカモメが飛び交っている。このナギで皆出漁した。富丸と末広丸が余市に向けて出航し、互いに競争するようにして行く。客の奪い合いも激しいようだ。夜になって寒くなり小雪が降り出した。それでも投網するところがある。

▼三月二二日

昨夜からの雪が二寸も積もった。聞けば港内の松田漁場では、昨夜初鰯一〇数尾とつたとのこと。この寒さでは沖で網起こしの漁夫もゆるくないだろう。夜になりまた雪がチラチラしてきた。

▼三月二四日

前浜の上田、酒井漁場では四、五〇尾とつたそうだが皆小鰯だとのこと。天気がよいのでスキナイの松山へ行く。からみついているブドーやコクワの蔓を切ったり、枝も少し払った。この時期は草も無く見やすいので作業にはよい。ネコオシロイのいい枝があつたので手折って帰る。△の山も見たが広くよい山だ。午後から学校保護者会の役員会があるので出席する。収支の予算など協議する。

▼三月二七日

昨夜は時化で、前浜だけしか投網しなかつたので漁も無かつた。リングの枝切りをする。去年はほとんど收穫が無いような状況だったが今年はいいだろう。浜ではスケソ外しをしている。店は今頃が一番ひまときだが、ガラス玉が意外に売れている。

▼三月二八日

今日は母の命日でお経を上げる。亡き母は実に骨身惜しまず働き、若い頃から随分と

苦勞された。私に対しても本
当にありがたい慈母であつた。
早九年余り当時が懐かしい。
今日か今日かと一日千秋の思
いで待つてゐる鰯漁、今日も
無い。歩方の若い衆などもカ
レ二、三尾やガンジを持って
帰る者が多いとか。銀鱗をピ
カピカ光らせた鰯を早くとつ
て、町の元氣をつけたいもの
だ。熊さんと農園へ行きリン
ゴの枝切りをする。雪解けが
早く、花畑ではもう青い芽が
出ている。昼は平から手製の
生うどん、夜は鎌田から貰つ
た鶏肉の入ったそばの馳走で
ある。浜に出て見たが今日は
いいナギでカモメが飛んでい
る。この天気まわり今夜の大
漁を祈る。

▼三月二十九日

六時起床、ローソク岩の方
から太陽がキラキラ輝いてい
る。鰯漁はサツパリだ。この
頃は鰯漁が少し早まって、二
十日頃初鰯があるので支度を
急いだが早一〇日も過ぎた。
今夜かと待つても退屈、仕事
がないので陸の仕事をしてい

る。今月中には賄い用の鰯ぐ
らいはとれるだろう。リング
の枝切りをしたが、腐乱病で
枝が折れたのもある。五、六
年後には古平からリングが無
くなるかも知れない。一〇年
前は随分盛んであつたが今は
水田熱に変わった。世の中は
さまざまに変化するものだ。
浜へ出て見る。今夜あたりと
刺網も皆出たようだ。吹く風
はまだ冷たい。

▼三月三〇日

店へ来た客に鰯漁あつたか
と聞いたら古平はダメ、美国、
積丹で五〇〇六〇杯とれたと
のこと、初鰯なので一箱六円
〇一二円ぐらいとのこと。困
ではいくらで売れたか。一杯
五百円として、六〇七千円に
はなるだろうから先ずは良か
つた。農園ではリングの枝切
りをしたが、一日中晴天で仕
事ははかどつた。雪を取った
ところではチューリップなど
が出ている。

▼三月三十一日

昨夜の様子では、今朝こそ
は鰯漁報を聞けるだろうと思

つていたがさっぱりない。明
日小樽へ行くので、初鰯を食
べてから行きたいと思つてい
るがこの分では如何やら。聞
けば困の野塚の一家統だけ五
杯ほどとつたという。湯内の
種金一〇二杯、その他は無い
らしい。困では昨日一尾二銭
に売れ、八千円もあつたそう
だが、今日は一銭五厘とのこ
と。抜け駆け漁をし実に良か
つた。今日の新聞に漁報が出
た。積丹七百石、美国四百石、
小樽、札幌では一尾二〇銭か
ら、夕方には七、八銭になつ
たとのこと。小樽や札幌の人
はそれでも食べられたが、産
地の古平の人はまだ食えぬ。
このナギの時に早く漁があつ
てほしいものだ。新地町で不
幸があり行く。久しぶりで新
地方面へ行くが大部分は泥道
だが、一部はカラカラに乾い
ている。カスベ、タラは昨日
から初漁が大漁だ。夜は月
も出て静かだ。

▼四月一日

今日は祝聖会例会、三時に
目が覚めたがまだ早いので休

む。四時半起床。鰯漁如何か
と思つたがさっぱり。人通り
もなく静かなところをみると
どうも思わしくないようだ。
洗面して早々に出かける。ま
だ町は暗く月が明るい。通る
人も無くヒソソリ、沖の方も
ヒソソリだ。漁は全く無いら
しい、どうしたことだ。寺へ
行くと㊦がすぐ来る。聞けば
漁は一向に無いらしいとのこ
と。読経が終わつて六時、朝
の寒さは随分厳しい。話をし
て七時帰る。幸治らが午後の
船で帰るといふので、妻はマ
ンジュウをこしらえている。
新聞を見ると三〇日夜、浜益
一〇〇〇石、増毛一〇〇〇石、
余市五〇〇石、入舸三〇〇石と
つたとのこと。今の時期浜益
方面でとれるのはどうもおか
しい。このナギ、この上天気
に食う鰯もとれないとは困つ
たものだ。午後一時の外浜丸
で幸治と文治が帰った。子供
らと本陣の浜まで見送る。浜
に集まっている連中と話した
が、九分九厘の人はまだ鰯を
食べていないという。美国か

ら外浜丸で、手籠に鰯を入れ
てあちこちへ送って来る有様
だ。こんなこともないものだ。
幸治も文治もとうとう鰯も食
べずに行ってしまった。夜、
父がこしらえたモッコに印を
書き入れる。四つもあつた。

▼四月二日

六時半頃目が覚めた。昨夜
の模様では今朝こそひと漁あ
らんと思ったら、起きて聞け
ばさっぱり無く何とさびしい
ことだ。四月二日になつても
初鰯も食えぬとは近來にない
ことだ。鰯々と言つて地方か
らも出面目的で随分来ている。
買い鰯の人も本年は特に多い
だろう。この漁ではヒマなも
のだ。建網業者も仕事がなく
困っている。このところ毎日
毎日の好天気でナギの続くの
も珍しい。雪の消えるのも早
い。一〇時頃、三〇年ほど前
に古平にいて、亡母と懇親の
あつたという人が訪ねて来た。
七〇歳くらいで二〇代の娘さ
んといっしょだった。鰯場の
仕事に來たと言ひ、父といろ
いろと昔話をしていた。聞け

ば昨夜、余市方面で大漁だつ
たとのこと。夕方、二階の窓
から沖を見たが実によいナギ
だ。余りナギが続くのも古平
では鰯漁によくはないようだ。
丹後さんで長男が二一歳の若
さで亡くなり、夜、通夜に行
く。丸山岬の方で網起こしを
しているようだとのこと。沢
江大坂さんから初鰯三尾、吉
から四〇尾貰いようやく初鰯
を食べた。

▼四月三日

今朝も全く無し、何と気の
もめることだ。入舸若林さん
からの電話で、生鰯で一万円
ほど売り、昨日は二七杯も沖
揚げしたとのこと。今日も上
天気、上ナギ、こんな日に沖
揚げしたらどんなにいいだろ
う。畑から持つて来て鉢植え
したチューリップ、だんだん
花が出てきた。この暖かさで
伸びるのも早い。夕方、浜に
出て見る。毎晩毎晩、今夜か
今夜かと待っているのに一向
とれんので、明日もアテにな
らぬような気がして待つ気にな
れぬ。古平で本日一〇石。

▼四月四日

起床六時半、就寝中に聞け
ば今日も漁が無いとのこと。
起きる張り合いもないようだ。
入舸、美国方面は漁があつた
とのこと。古平から余市方面、
小樽までさらに無い。古平で
はまだ一〇石ぐらいだという。
農園では枝切りをしている。
幸治から修学旅行の予定表が
送られて来た。四月一五日出
発、往復一日間、積立金二
四円あるからあと九円を学校
へ納め、外に昼食代五円ほど
入用とのこと。小遣い共三〇
円もあればいいだろう。荒れ
そうだった天気もまた静かにな
つた。一〇時頃、支店の湯
から帰つて来たら、山中方面
で網起こししているとのこと。
明朝こそよからう。

▼四月五日

昨晚一〇時頃、妻が支店の
お湯からの帰りに、歌棄山中
で盛んに起こしているのので浜
まで出て見たとのこと。その
話に古平にもいいよ来たか
と喜んで休んだ。午前三時頃
からモッコしよい連中がガヤ

ガヤ通る。自分も五時半起床、
早速浜へ出て見る。山中〇、
九、キ、原田、△、崎長、
八反田あたりは一〇杯ぐらい
とれたとのこと。㊦も二、三
杯だ。九時頃また浜へ出て見
る。刺網もバラバラ掛かりだ、
五、六本はあるだろう。今日
の予想は約千石だ。熊さんは
〇へモッコしよい。昨日の予
想では荒れるだろうと思つた
天氣が、一天雲なき青空、上
ナギになつた。困主人、近藤
先生の見立てでは軽いチブス
とて今日家の中など消毒した。

▼四月六日

昨夜の模様では今朝は良い
だろうと思つていたが、ほん
の少々、群來村方面で漁があ
つたとのことだ。新聞を見る
と岩内、古宇、磯谷では五千
石もとれ、増毛、天売、焼尻
でもとれている。しかし余市
から小樽近海は皆無だ。こん
な変調なこともない。古平は
それでも昨日の漁であちこち
鰯つぶしやら背割りを干して
いる。私の家でも昨日、背割
り二百枚近くも干す。ダシ風

が強いので干すのには実によい。これで雪も消える。午後二時頃、農園へ行つて見る。熊さんは枝切りをやっている。雪も七、八寸ぐらいだ。場所によつては土が出ているところもある。四時帰る。

▼四月七日

起床六時半、妻は家の中の仕事で忙しい。熊さんは沖揚げもないので農園へ枝切りに行く。今日も期待した漁はさになくさびしい。美国では漁があつたとか、やぶ長では鯨を買つて来たという、一本一〇円とのこと。大型でよい鯨だが値段もなかなか高い。古平はこの通りの不漁、美国へはつづ買いがドンドン行くので高いのだ。今日はこの頃で一番の暑さ、寒暖計五二度F(一一度C)、水温も昨年より意外と高くなっている由、増毛辺りでもとれたといっている。何やら心配だ。今夜でも大漁があつて町民の笑顔が見たいものだ。

▼四月八日

昨夜は静かな、鯨のとれそ

うな晩であつたから今朝は必ず吉報あらんと休んだのに、起きてみれば今日もまたほんの少々。△、崎長、神田などで五、六杯、刺網五、六本あつたとれたとのこと。このナギ、この天気ですつぱりとれぬとは実に気のめ入ることだ。山方面からも出稼人がたくさん来ているが、この不漁では仕事もなく帰る者もあるとのこと。積丹は今朝とれたとのこと。本年はあまりナギ天気が続きすぎて古平辺りは悪い。こんなナギ続きも珍しい。今日などは夏のように暑いほどだ。町中の雪もこの天気で八分どおり消え道路はカラカラ、子供らはゾウリをはいて遊んでいる。夕方、正治を連れて浜へ出て見る、波がチャプリともしないナギだ。絶好の鯨日和だ、今夜こそあつてもよさそうなものだ、早く吉報を聞きたい。

▼四月九日

昨夜、川尻の方で盛んに起こしているとして、浜へ見物人がたたくたさん行くので私も行

つて見た。④の浜は三〇人余りが集まつて漁の様子を見ている。中などで起こしているとのことだが外はないようだ。今朝はよい漁があるだろうと期待して休んだが、起きてみればさつぱり。中歩方は七、八杯あつたとのこと。田岸歩方六、七杯あつたとてモッコしよいに行き、一モッコ貰つて来る。何だかさつぱりおもしろくない鯨漁だ。増毛方面でもとれたとのこと、悲観せずにはおられない。水温は八度以上あるとのこと。町の雪も消えてゾウリで歩けるようになった。今日などはコタツも要らぬようだ、子供たちも戸外で遊んでいる。農園へ行つて見たら雪は二、三寸、サフランが蕾をもつていたので鉢上げする。トミらがアサヅキ採りに来た、二寸ぐらいになつていて、たくさん採つて四時過ぎ帰る。夜、奥野おつかさん五二歳で亡くなつたので通夜に行く。二、三日休んだだけで亡くなつたというが気の毒なことだ。静か

なよいナギ、鯨のとれそうな夜だ。建て込みから一回も時化で揚網せぬ、こんな好天気続きは何十年来稀なことだ。

▼四月一〇日

起床六時、今朝こそ大漁ならんと期待していたが、沖村田、その他五、六杯、浜中田岸歩方五、六杯、まだ賄い分もとらぬ建場が二〇か統もあるという。刺網も四、五本から二〇本ぐらいだ。毎日毎日の好天気はこの上ナギ、こんな時に沖揚げしたらどんなにかよいことならん。奥野の葬式送りに行く。店は閑散だ。札幌白石村の高橋さんは一昨年出面に來たが、本年は不漁のため積丹まで行つても仕事がなく、昨日戻り一泊して今朝の船で帰宅した。

本日までの鯨漁の概況

積丹一万石 美国一万石
古平四千石 余市六千石
古宇一万石 岩内五千石
磯谷五千石 張碓二千石
増毛四千石 留萌三千石
小樽近海なし

(続く)

町内の学校探訪

古平小学校

◇生徒心得の制定

当時北海道は札幌・函館・根室県の三県に分かれていて、教育に関する細かい取り決めは各県に任されていた。古平は札幌県の管轄下にあったが、明治一八年(一八八五)、札幌県では次のような生徒心得を制定した。

- 一、生徒は学校の規則を守り、学業に励み、温順正直を主とすべし
- 一、教員、尊長(目上の人)を敬慕し、朋友には親愛を主とし、常に信義、礼讓(礼を尽くしへりくだること)を重んずべし
- 一、敬礼すべき人が教室に入るときは、教員の指揮をまつて礼節をなすべし

一、道で教員、朋友や知人に会ったときは、丁寧に礼節をなすべし

一、身体、衣服などはすべて清潔にすべし

(以下略)

これらのことは当時でも生活上のごく一般的な作法であったが、学校教育の中でとり上げられるようになったということは、学校教育への大きな期待の表れでもあった。

この年の十一月、古平・岩内方面を視察した、札幌県御用係を兼務していた札幌師範学校三等教諭庵崎亮慶はその復命書の中で、
「古平・岩内方面においては、学校事業は一般に振興している状況が見られない。その理由としては、住民の子弟教育への必要性をあまり感して

いないという、考え方の乏しいことによるものである。また学校の指導も暗記や暗唱することを主とすることから抜け出していない。生徒の学んだことが実益として成果を挙げている面もあるが、住民の上に立つて行政を行う者として、学事をないがしろにしている点にも原因がある。」
と厳しく指摘している。

これより前の明治一六年初等科(三カ年)・中等科(三カ年)・高等科(二カ年)と通して八カ年の国の定めた小学校則によつたが、札幌県下の就学率はまだ低かった。その第一位は古宇郡の七八%であり、古平郡は五六%で第六位であった。

◇学年と卒業証書

学校の始業は九月一日に始まり、翌年の七月三十一日に終わる。これを前後二期に分け、前期は九月一日から翌年二月末日までの六ヶ月間、後期は三月一日から七月三十一日までの五ヶ月間とした。

浜中学校の第二回卒業生については記録が残っていないが、最も古いものでは明治一七年の卒業証書が残されている。

証

川嶋久次郎

小學校初等科卒業

候事

明治十七年十月五日
札幌市志田町古平郡
濱中學校

濱中學校

第五号 證

川嶋久次郎

十三年十月

小學校初等科卒業候事

明治十七年十月十三日

札幌県後志国古平郡

浜中学校

学年の進級や卒業に当たつてはその度に厳しい試験が行われ、進級については厳しかった。各科の課程ごとに卒業証書が与えられ、また成績優秀な児童については、試験のつど賞が与えられていたことが次の賞状からもうかがわれる。

中等科第六級生

川嶋久次郎

十三年七月

學業優等三付三筆賞

授與ス

明治十七年十月一日

濱中学校

中等科第六級生

川島久次郎

十三年七月

學業優等三付三筆賞授与ス

明治十七年十月十三日

浜中学校

證

尋常科三年生

齋藤吉郎

品行端正學業優等付

三等賞ノ授與ス

明治二十一年三月五日

北海道立

北海道立第一師範学校

◇學田地の無償付与

明治十九年、学校維持費の一部に充当するため、浜町字鴨居木に學田地として無償付与を受けたが、当初は直ちに耕作地として利用でなかつたので小作に貸与されていたが、この土地は戦後の農地改革により国に買収された。

◇浜中小学校と改称

明治十九年(一八八六)四月、新しい小学校令が公布されたが、北海道は特殊な状況にあるということから、小学校規則と別に小学校簡易課程を制定し、小学校規則と小学簡易科教則として、明治二十年四月、庁令として公布した。

浜中学校ではその庁令により「小学簡易科教則」を適用し教育することになり、校名も浜中小学校と改称した。

小学簡易科の教科書はそれぞれの県の定めたものとし、小学簡易科では初等科のものとした。

簡易科は修業年限が三カ年で、学年は九月一日に始まり、翌年八月三十一日に終わり、一日の授業時間を三時間とした。また温習科(繰

り返して復習をする、芸事では温習会がある)を設け、小学簡易科を卒業したあと六か月から一年間、既習学科についての補習を行った。学科は読書、作文、習字、算術のほか、実業学科を時間外に週三時間とした。休日は日曜と大祭日、神社祭日、歳末と年始には一五日以内、生業繁忙期には五〇日以内の休暇を設けることができた

道内で国の定めた小学校令により、町村立の学校で尋常科・高等科を併置した学校は札幌創成学校・函館弥生学校・福山(松前)松城学校の三校だけであった。

◇浜中小学校が全焼

明治二〇年一〇月六日、校舎から出火し、付属する建物共に全焼し休校した。二階中央部は銀行が使用していたが、出火の原因は不明であった。

港町にあった収税倉庫を仮校舎とし、簡易科三学級編成で授業を開始した。学校の資料などは全て焼失してしまつた。

翌二一年、港町にあった官有の建物一五八平方メートルが校舎として下付されたが、同年六月、現在の

町役場の裏側に一三五平方メートルの校舎が新築された。

◇新地小学校創立

浜中小学校が全焼したのを機に、明治二二年三月、新地小学校を創設した。新知町の古平警察分署跡の建物一七二平方メートルを校舎にしたが、翌二三年一〇月、新地小学校が新築された。

新地小学校はその後、明治二四年一〇月、浜中小学校分校となつたが、昭和三八年、町内の他の二校と共に後の古平小学校に統合になった。

← 浜中小学校の児童の写真としては最も古く、後々の建物は消失以前の校舎前と思われる



新年に寄せて

大澤文子

全国的に穏やかな暖かな新年を迎えた。寒の入り：七草と日めくりを繰るのも早い。ほころび初めた白梅も寒の入りと同時に報じられた。今年も平和でありますように：と誰もが年頭に祈る願いであろう。

新年という節目にあたり思い出すのは……。ドイツのある詩人の「時の歩みは三重である」……という言葉だった。

○ 未来はためらいつつ近づき

○ 現在は矢のように早く飛び去り

○ 過去は永久に静かに立っている……と。

今年はねずみ年

ふと思い出すのは、まだ幼い小学生の頃、母の教えてくれた「十二支」の順序が覚えられず、二歳年

上の姉とスキップしながら、歌うようにして順序を覚えたものだつた。

「ね・う・し・とら・う・たつ・み・う
ま・ひつじ・さる・とり・いぬ・い・」
と、幼かつたあの頃は漢字など分
かるはずがない。十二支の順序を
歌いながら楽しく覚えたものだっ
た。

現在、十二支の漢字を「第四版の広辞苑」の暦法でなぞってみた。

子丑寅卯辰巳午未
申酉戌亥

等々で面白いと思つた。

今年の正月休みには外出せず、
一年の休日とばかり連日執拗に
テレビ観賞ときめこんだ。

ふと「家庭の健康について」の座談会があり、興味津々長時間目を向けていた。

「人間はいくつになっても大なり小なりの荷物を背負い、人生の坂道を登っていかねばならない。」

「心にある目的、希望をもっているならば、荷物を背負っていても明るく元気に歩んでゆける」という訓話のような話からはじまり、次に特に男性の「健康維持」についての話があった。

第一に先ず睡眠…、第二…、食生活の栄養管理、休みの日には、ごろ寝、等々が三大対策という。休みには、ごろ寝の話が出ると揃つてうんうんと相づちを打つ男性軍に思わず笑つてしまった。

また、主婦連の「健康対策」としては、先ず「睡眠」「食生活の健康管理」次に「仲の良い友人とのおしゃべり」…等々がベストスリーという。現代の主婦連の知恵であろ
うか。

お金のかからないお喋りの中には勉強になることも多く、お互いの食生活、衣類のこと、子らのこと等々、また悩みの解決策も……。主婦連には山ほどある楽しみびとの交歓等々。

別に多大の金銭もかからぬ女性独特の知恵であらうか。

「今年の抱負は？」なんて私にマイクを向ける酔狂な人もないが、私なりに質問して私なりに答えてみようか……」

先日、心理学の権威者である先生の対談を聞いたが面白い。また楽しく、納得する面もあり忘れようにノートの端にメモしておいた。

「辰年の辰は振動の振の右辺にある文字、新しいものが生まれ出ずる躍動の意がある」という。

細い小道であらうとも、雑草を
分けつつゆつくり歩みつづけよと
いう意味であらうか。

あら草であらうとも地上を這いゆき、いつか地上に小花を咲かせ種子を散らす。そしてまた地上を這いゆき愛らしい小花を咲かせる Ⅱ

もうそろそろ春の足音がきこえるぞう。

- ・適度の運動をして汗をかく
- ・文字を書き続けて脳細胞に刺激をあたえよう

・そしておしゃれを…なんて…
ひとり合点して、ペンを描いた。

オウロラの魅力

葛 西 庸 三

札幌市在住の作家「小檜山博の文学を読む会」を立ちあげて六年目となった。

最初は仲間五人で出発したのだが、今は九人でやっている。平均年齢は七十歳なのだが、お互いに気持ち若く、毎月二回、お互いが担当するテキストの二十頁ほどを事前にしっかりと読んでくる。

作家小檜山博は、『出世作』にはじまり、初期のものは文章が重厚で読むのに難渋することがある。併し不思議なことに、六年目の今となれば、硬い純文学の作品も、心底から楽しく読み合うことができる。お互いの読みが深まり、テーマに迫ることができるようになったからだと思う。

それにしてもよく、毎月二回、六年にも亘ってよく続けてきたなあ、と感慨を深くする時がある。読書会が終わる毎回、パソコンなどできない私は、ミミズがのたくつ

たような字で原稿を書きコピーして、妻と一緒に仲間のうちへ配る。六年目ともなれば時々投げやりな気持ちになり、大儀だなあ、と思う時もある。そんな時、会計を担当している妻に、「今度は会報をあんたが作ってくれや」と言う。「そんなこと言うんなら、私、会計辞めるからね」と妻はむくれる。

そして、「読む会をやっているのは人の為ではないでしょ。結局はすべああなたの為なのよ」と言う。

考えてみれば確かに妻の言う通りなのだ。

自分でも作品の読みが深まり、文章を書く時随分参考になっているなあ、と思う。

さて、私共の読書会が六年も続けてこれたその訳はなんだろうか、と妻と話し合う時がある。

矢張り答えは、テキスト、つまり

小檜山文学が優れて感動的であるからだ、と思う。読み合う度に、感動する喜びが仲間の心に煌く。これがなければ続く訳がない。

第二は、石狩市民図書館職員への献身的な援助である。最初は会場の設定など総てのお世話をしてくださった。二年前、読む会主催で「作家生活三十年、小檜山文学の世界―資料展」と「講演会」を図書館の後援で開いたが、その時などは、夜の十二時過ぎまで、何人もの職員の方が資料の整理や配置などの作業をされて、本当に有難いことであつた。

第三は、仲間である。平均年齢は七十歳であつても、お互い、精神が若い。何時までも青春の気持ちの持ち主だ。そして、人柄がいい。どうして、こんないい人ばかりが揃つたのだろうか、と不思議に思うことがある。

そして、長続きしている一番重要な要素は、作家小檜山博氏と日常的な交流があることだ。

名のある文学賞を幾つも貰い、日本現在文学に確固たる地位を占め、北海道功労賞受賞に輝く小檜山博氏なのだが、実に気づけば

りのされる、気さくな方なのである。

昨年の暮れの十二月二十一日、読む会を終えたあと「五周年記念の夕べ」をもつた。小檜山博氏にも、若しご都合がございましたらお出で下さい、とご案内は差し上げてあつたのだが、ご多忙の身なので無理だと思つていた。

記念の夕べは五時半から始まる。さて、始めようかと腰を上げた時、電話が来た。

「今、石狩まで来ているのだが、運転手が会場の番地の場所が解らなくて迷っている。」

仲間は一斉に歓喜の声を挙げた。苫小牧市で障害児を持つ親達の集まりでの講演会を終え、そのまま直行して来た、とおしやつた。

会が始まると、仲間の一人一人の話に耳を傾け、感想を話される。短い言葉なのだが、珠玉のように煌き、私共の胸に響く。二次会はカラオケだ。更に人間的なふれ合いが深まる。

読む会が続けられる大きな要素の一つは、作家小檜山博氏が発するオウロラの魅力があることはまちがいない。

今であれば何ということもなく伸びている229号線・積丹国道ですが、その開通までには幾多の苦難の歴史がありました。今年はこの国道が開通してからちょうど五〇年になります。資料により当時のことを回顧して見るのも、ふるさと・古平の歴史を知る一助になるのではないでしょうか。当時

近隣との交通はけもの道を踏み固めたような道路によって、かろうじて確保されているような状態であり、「陸の孤島」は住民にとつての実感であった。やがて昭和になり、積丹半島住民の悲願は自動車道路の建設であった。

★海岸道路の着工

昭和二三年、関係町村による余

住民の悲願

「陸の孤島」から開放

①

積丹国道開通

の貴重な写真を多く取り入れて、着工から完成までの一〇年を振り返つてみたいと思います。

× × ×

★陸の孤島

明治のむかしから日本海沿岸は鯨漁の宝庫であったが、その障害は交通の不便なことであった。海岸線の多くは海岸まで断崖絶壁が迫り、特に積丹半島沿岸部は、

市・積丹半島開発振興会が発足、
①余市・古平間海岸道路の建設
②積丹原野二千町歩の開発
③余市・余別間の鉄道敷設
が協議され、道議会や国会に陳情が行われた。

これについては『積丹原野の開発、北後志一丸で郷土振興』という見出しで、当時、北海道新聞にも大きく報道された。

その後、政府からの視察や陳情などあり、昭和二三年度分として、沖村・湯内間の海岸道路の開削がいよいよ始まったのである。

海岸の絶壁、そして山また山が連なるこの区間に「海岸道路が作られる」という朗報は、はじめの内は町民にとつても信じられなかった。工事完成後の伊藤町長(当時助役)の談話にも、「あそこに海岸道路を造ると言われたときは、びつくり仰天した」とある。

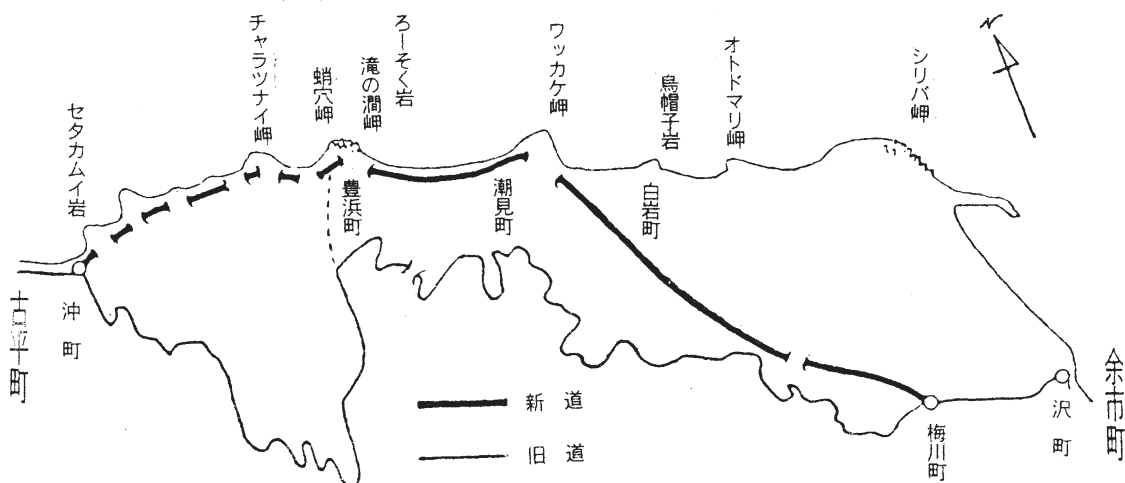
同年九月、すでに工事が進められている中、工事の起点であるセタカムイ岬の沖村側で着工式が行われた。

★自然に挑む

難工事の連続

着工はされたものの、それは想像以上の難工事であった。山側ではがけ崩れや雪崩の危険が多いこと

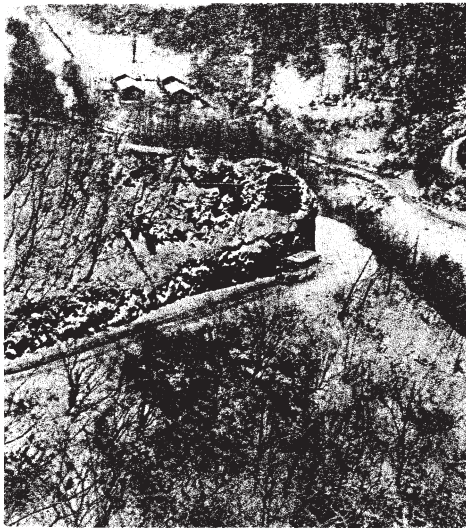
旧余市山道と積丹国道・229号線の道路図





↑ 湯内峠での車の交差
(豊浜・沖町間)

↓ 湯内峠をあえぎながら登るバス



から、道路はぐつと浜側にはみ出るように計画され、建設資材や物資輸送の關係でセタカマイ隧道の完成が急がれたが、初年度の工事の進み具合は予定の僅かに三パーセント程度で、当初から難工事であることが予想された。

その後も工事は難行を極め、その上多額の工費を要することから、これは国費をもつて行うのでなければ続行は困難であり、その完成は到底おぼつかないと考えられ、そのためにはぜひとも二級国道か、国費負担の路線に認定されなければならなかった。これま

でのような知事が管理する地方費道のままでは、いつ工事が打ち切られるのか、また工事の早期完成についても懸念された。

★国道期成会が発足

一二級国道へ向けて運動していた昭和二十七年、道路法が改正され、北海道の国道の中に余市・古平間が入つていなかったのである。その後、さらに道では国道の追加を国に要望したが、これをめぐつてた町村の運動も激しく、古平町からの運動の実現も危ぶまれるような状況にあった。

の古平・余市・岩内・美国・入舸・余別・泊・発足・神恵内の九が町村が急ぎ積丹地方国道期成会を発足させ、一丸となつて運動を進めることになった。会長の伊藤古平町長は各方面への運動を行ったが、当時は国道に認定されなければ完成はおろか、工事が中断されるかも知れないという危機的な状況にあったのである。

★すさまじい陳情合戦

当時の町弘報にはこんなタイトルが大きく出ていた。「積丹地方国道の成否は産業の生命線」、道路法が改正になってからは、各地



← 国道開通前の出足平町の町並み(ニテタリビラ潮見町)

からの国道認定の陳情合戦はすさまじいものがあり、その後も上京した伊藤町長からは、「この国道認定問題は、その後一転して極めて悲観的な情勢になり、関係町村の町村長や後志支庁の課長らとがんばっている。今後の道路審議会に向けて全力を尽くす」という連絡が入り、関係者を緊張させた。

新しき年

瀧 内 優 子

穏やけきわが七十八歳の元旦のいづことなき風の遠鳴り
 乏しさに育ちし母の菜の雑煮淡白にして今に恋しき
 新年のさ庭に日差し目に追ひば二羽の鴉の睦まじきかな
 凍て強き小寒の朝寒菊の花の白さがかがやきを増す
 雪の降る昼を温とく喉過ぐる珈琲に身を愛しみにけり

歌一つ成さむとしつつ木枯らしの強まる峽に心冴えみつ
 夜ふかく目覚めてをれば潮騒のごと雑木木に風さわぐ音
 吹雪の夜囁り泣くがに風吹くを聞きぬし音の行方の知れず
 新年をはや幾たりは新聞の死亡の欄にその名を載す
 厨べに野菜とりどり揚げてをり生き生きと主婦我のひととき

＊ ＊ 編集集 雑誌 ＊ ＊

家にいる時間が多くなると、新聞を読む時間も優に二時間を越える。主なニュースはテレビで見るので、新聞は読み物として、関心や興味の惹かれるようなところを読むが、手元に相当な参考書でもなければ、記事の内容などとても理解できそうにもない——が大いに勉強にはなる。

先ごろの道新(一月一八日付)に、二〇〇七年の『いずみ』(読者の投稿欄で女性に限る)の大賞・奨励賞の発表がありました。『せたかむい』の短歌欄にも毎月秀作を発表してくださる東美知さん(積丹町)が、奨励賞四人(大賞一人)の中に選ばれました。昨年の九月二十九日に掲載された『ウオーキング』と題した一文で、そのときも、「生活の中から生まれた自然な文章の中にも、なにか感動のある文章」だなぁ、と思いつながら読んだ記憶があります。



運動のほうはどうも苦手だが、冬は専ら除雪作業で少々汗を流しているがどうも座っている時間

が長い。「せたかむい」の編集でパソコンに向かっていることが多いが、あれこれ考えているうちに日が暮れてしまう。先日の読売新聞に面白いことが出ていました。

「今から千年ほど前、中国の古い時代に欧陽脩(おうようしゅう)という学者がいました。彼が妙案が浮かぶ場所としてあげたのが「三上」(さんじょう)で、それは「馬上」「枕上」「廁上」のことを言います。枕まくらですから寝ているとき、廁かわや・トイレに入っているとき、が文章を練るのに最適だと言っています。

ひとりであるときが、いちばん真剣に物事を考えられるということでしょうか。確かに一理あります。試されたら如何でしょう。

平年であれば二月と三月は曜日が同じなのですが、今年は閏年(うるうどし)でこれが当てはまりません。そう言えばオリンピック開催の年が閏年でしたね。世の中のサイクルにうまく適応していないと、今日は何日でなん曜日なのかも失念してしまいます。

日脚も伸びてきましたが、間もなく暦では啓蟄(けいちつ)です。地中の虫もそろそろ這い出てくる頃……春も近づいてきました。



雜詠
主宰 水見壽男
〔十一月号〕

万緑を引き込んでゐる磯の波
万緑を碎き磯波荒ぶれる
螢火や海の青さの沈みたる
湯の宿の闇を広げて河鹿鳴く
潮鳴りや三味の爪弾き夏料理
含羞草何度もおじぎさせられて
大小を問はず眼に染む瀧の景
寄する波返す波音海晩夏
土用浪若者嬉々とサーフィン
夕焼や投網舟影湖に浮く
鳴り潜め雷どこを狙ひしや
一湾の静もるかもめ雷光る
磯の香の通りぬけ行く夏座敷
潮騒の香りとどめし夏座敷
夏の海日射しの洗ふ波の音
浜風を呼ぶ手作りの夏暖簾

越野清治

山口悦子

越野敏雄

高橋重子

【句評】

雲の峰雨を残して流れ去る
風鈴が風のありかを教へ呉れ
空蟬の樹木に残る爪の跡
天然のうなぎ見事に捌かれる
白も亦燃ゆる力や雲の峰
天心やひとひらの雲月涼し
天景を載せる海面や雲の峰
風鈴の澄む音なほすみにけり
湾岸にじわじわと夏の霧
海の虹対馬海流色濃ゆき
八方の西日の濃ゆき日本海
利尻富士聳ゆ渚に昆布拾う
漁火を置いて遠のく夏の月
夏霧の緞帳の如海閉ざす
風音の途切れて深き夜の秋
夏潮や海の鼓動の始まれり
夏霧のたむろしてゐる入江かな
炎暑なほ岬の漁火揺れ止まず
炎天に悠然として日本海
一筋の雪溪光る岳まぶし
風軽き波音軽き夏岬

外山俊久

堀典子

本間寿昭

渡辺嘉之

室谷弘子

怒涛

〔二八〕

—二月号—

海鳴りや幾たび目覚む秋の夜

外山俊久

十勝野の花の絨毯天高し

キャンバスに青無限なり秋の空

越野清治

十六夜の月ほのぼのと静かなり

堀典子

秋草や鳥が持ち来し種育つ

斉藤波留

大花野岬に続く道険し

本間寿昭

夕ぐれの大波の裏月のぼる

山口悦子

海を消し岬を隠して海霧来る

渡辺嘉之

山霧の狭の深さを隠しけり

越野敏雄

岬径の一叢制し虫の声

室谷弘子

静もれる午前0時の虫の声

大和田絵伊

何時の夜も海鳴り止まぬ岬の秋

仲谷比呂古

初潮や積丹半島交し漁場

高橋重子

秋蝶の前に後にと岬の径

高橋重子

短歌

古平町岬短歌会

山合ひに住みゐし君は仏法僧の鳴く声真似て幼な日語る

池 田 テ ル

波のりの人か荒れ狂ふ海原の浪のはざまにこの葉のように

金 子 寿 子

積丹の景色を見むとドライブす太陽そそぐ海の輝き

坂 本 信 子

競技みな終へて静もる運動場やはらかに秋の芝生萌え初む

鈴 木 時 子

すこしずつ麓の方に紅葉の移ろひながら秋深みゆく

田 中 香 苗

海に向ひ川巾いっばい並びみて鮭釣る人ら雨降る中を

丹 後 初 江

我が町を通るツールド北海道へリコプター添ひ瞬時に過ぎぬ

寺 田 カ ツ 子

雷の空を揺るがす一瞬を雲間暗めて雨のしのつく

仲 谷 喜 美 能

夜半の水飲む厨辺に虫の声一時止みしが又鳴き始む

東 美 知

久々に山道通る木の下に木の実落ちくるよろこぶごとく

堀 典 子

俳句

海原に影を雫して星月夜

越野清治

鮭のぼる古平大橋人ばかり

斉藤波留

露しげき湖畔の宿や湯の煙

山口悦子

恋トンボ空に止まる枝のあり

越野敏雄

棚経の僧と孫との会話かな

大和田絵伊

無月なる程漁火の遠く見ゆ

高橋重子

十勝野の花の絨毯天高し

外山俊久

黒土に精霊蜻蛉かぎりなし

堀 典 子

追手波宵の帰港や風九月

本間寿昭

秋の夜や溶けるがままの空と海

渡辺嘉之

湾の闇更に深めて虫時雨

室谷弘子

街中を揺振り掛ける颱風来

仲谷比呂古

古平町史年表

昭和34年(1959) ~ 続く

5/29: 古平町役場で、積丹半島の地下資源開発協議会が開かれる

6/9: 海上自衛隊大湊総監部所属の『ふじ』『ばら』(『ゆり』型の同型艦で排水量300トン)の2隻が入港し一般に公開される

6/10: HBCラジオによる『この声百万ドル』が古平劇場で公開録音が行われる

6/13: 入船町海岸線の堤防災害復旧工事が着工される

6/ー: 古平漁港促進協議会が開かれる

7/9: 寿原正一が消防車を寄贈、これを『寿原号』と命名し恵比須神社で命名式が行われる

7/17: 浜町工藤宅から出火し1戸を全焼したが、この火災で寿原号が初出動し威力を発揮する

7/20: 立教大学陸上部が禅源寺に宿泊し、マラソンの強化合宿を始める

7/23: 古平町で貸し付けをする緬羊23頭が到着し、飼育農家に配付される

8/3: 北海道庁小栗技師外が稲倉石地区に現地入りし、地下資源調査に当たる

8/ー: 古平中学校体育館でNHKラジオによる『声くらべ腕くらべ』の公開録音が行われる

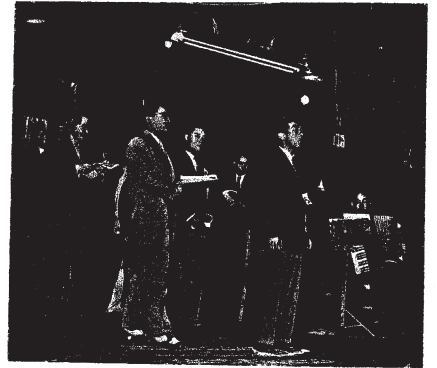
9/22: 稲倉石鉱業所の6200トンの浮遊選鉱設備が完成し、落成式が行われる

10/25: 沖小学校が開校80周年記念式を行う

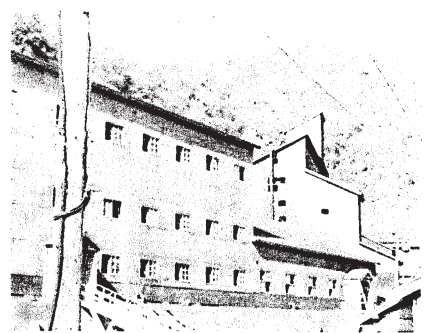
同: タ丹後漁業の大謀網でブリ2千尾(300万円)、27日もブリ3千尾(450万円)を水揚げし記録的な大漁となる

11/9: 古平町議会懲罰委員会が、三浦一二三議員を除名処分にする

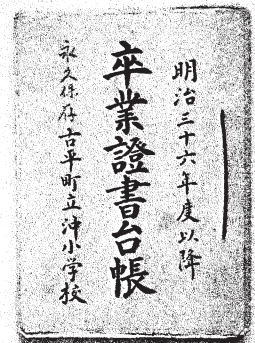
11/ー: 古平漁港に定錨が設置される



↑ 講会録音に先立て古平小学校運動場での練習風景



↑ 稲倉石鉱業所に建設された最新式の浮遊選鉱場



↑ 沖小学校の卒業証書台帳(明治36年度以降)